

園番号 630

令和2年度 奈良市立富雄第三幼稚園 研究実践概要

園長名 小西 茂美
全園児数 18名

1. 研究主題 心身ともに健康で主体的に活動する幼児の育成
～ さまざまな感動体験を通して ～

2. 研究年度 2年度

3. 研究主題設定理由

核家族や少子化で、入園するまでは家庭中心の生活で温かく見守られていることが多く、他者との関係に限られている傾向にある。そのため、子ども同士や多様な人とのコミュニケーションを図る機会が少ない。そこで、さまざまなひと・もの・こととのふれあいやかかわりを通して、感動体験を多く持ちコミュニケーション力を高めながら主体的に活動する幼児を育てたいと主題を設定した。

4. 具体的な研究内容

①研究のねらい

・幼児が身近なひと・もの・ことのかかわりの中で、様々な経験を重ね、心身ともに健やかで主体的に活動できる幼児を育てる。

②研究の重点

- ・さまざまなひと・もの・ことのかかわりを通して主体的に活動する力を育てるための環境構成や援助の在り方を考える。
- ・地域・家庭・保育園・小中高などいろいろな人たちとの交流や連携を通して、感動体験を積み重ねられるように、保育の工夫をする。
- ・感動体験では一人一人の感じ方が異なるため、一人一人を丁寧に援助していく。

③活動の方法

《4歳児》

事例1・・・「ダンゴムシ もてたー」(6月)

幼稚園が始まり、楽しみに登園してきた。虫が好きな幼児の為に虫捕り網とペットボトルの入れ物を個人持ちに準備した。

登園するなりA児「ダンゴムシがいる」B児「ほんとだね」と靴を履き替える場にダンゴムシが歩いているのを見つけた。A児「とって。僕、もてない」B児「かわいいのに、丸くなるよ」と触れないことをアピールしていた。その時5歳児のC児に「一緒に探そうか？」と誘ってもらいダンゴムシ探しに夢中になった。プランターの下や植木鉢をよけて探すと何匹も出てきた。C児「かわいいで、さわってみ」とダンゴムシをA児の手のひらにのせるとA児「もてた！」と大喜びをし「みてみて触れるようになった」と保育者に見せに来た。

大切な物を持つかのようにペットボトルの入れ物に指先でそーっつつまんで入れていた。

<反省・評価>

初めはかわいいけれど触るのは苦手という思いがあり、自分からなかなか触ることができなかったが、5歳児が触っているを見て、優しく安心できるように声を掛けてくれたことで自分でも大丈夫と思ったようだ。ダンゴムシに触れることができるようになり、自信を持つことができた。



事例2・・・「大型バスに乗って、えんそくだー！」(2月)

今年度はコロナ禍で地域のみの遠足だったが、お別れ遠足では大型バスに乗って“はしゃキッズ”に行くことになった。大型バスに乗るのも初めてで何日も前から「いつ遠足に行くの？明日？」「大きいバスに乗るの？」と楽しみにしている様子が見られた。

遠足の日には朝からウキウキしながら登園してきて、バスを見ると「これに乗って行くの？やったー！」と大喜びだった。はしゃキッズの入り口で中の様子が見えると「わー楽しそう、早くあそびたい！」とワクワクし、中での約束の話を聞いてからすぐに飛び出して、自分の行きたい所に走っていった。ボールプールに飛び込む子、ジャングルジムから螺旋滑り台に行く子、大きな滑り台に5歳児と行く子、「小人が住むパネル」にタッチしに行く子などそれぞれに思うところで遊んでいた。大きな滑り台では怖いながらも頑張る姿も見られた。体をしっかりと動かして遊んだことと、みんなでバスに乗って出かけることの楽しさを十分に味わった。「あー楽しかった。また行きたいな〜」という声が聞こえた。

<反省・評価>

今年度はコロナ禍で遠足も身近な所しか行けなかったが、感染予防しながらできることが増え遠くまで行くことができるようになり、初めての大型バス、みんなで初めて行く所、楽しさがより大きくなったようである。



《5歳児》

事例1・・・「浮かぶ舟をつくりたい」(7月)

ビニールプールに色々な物を入れて“なにが浮かぶのか”“なにが沈むのか”を試しそれらの性質を知り、数日に渡って楽しんでいた。ある日、A児「これつなげて舟にしたら面白いんじゃない？」と言う声からそれぞれつくりたい舟を工夫してつくり始めた。A児「できた!!」と言って舟をプールに浮かべると横に倒れてしまった。「なんでだろう？」と言って

考える。「もしかして重たいのかな？減らしてみよう」と横に付けていたスプーンを外したり、付ける場所を変えたり工夫していた。その日の話し合いで、斜めに浮いてしまう舟をどうしたら真っ直ぐに浮くのか話し合った。C児「ここにストローがついてて重いから横になるんやと思う」T「なるほどね。どうしたらいいんやろう？」C児「ここに付けたらいいねん」と真ん中を指さす。T「なるほどね」D児「私も最初転んだけど、後ろにカップつけたら真っ直ぐに浮いたよ」とまた別視点の意見がでた。次の日つくり直した舟をプールに置くと「わー!!やったー!!」「浮いた!!」と、真っ直ぐ浮かぶことに成功したことを喜んだ。

<反省・評価>

色々な物を水の中に入れ、浮き沈みを試すことで物の性質の違いを知った。その性質を活かし、材料を組み合わせる舟づくりをしていくと、斜めになったり沈んだりしなかなか思うようにならなかったが、友達のアドバイスを参考につくり直し浮かぶ舟をつくることが出来た。1つのことに疑問を持って考えたり、友達のために意見を出したり、友達の意見を取り入れたり試行錯誤を繰り返したからこそ成功したときの喜びをより感じる事ができたのではないかと思う。



事例2・・・「流れた!!」(9月)

砂場で水と木と葉っぱで”流しそうめん遊び”がはじまった。A児「今日もそうめん流ししよう！」B児「うん！しよしよ！」と、といやビールケースを自分達で準備する。昨年の経験から、ビールケースを台にして、といを坂にしてコースをつくる。A児「よし！できた！」C児「流そう！」と言って遊びがはじまった。A児「あ！詰まった！」B児「ほんまや」C児「もう一回やってみるわ」と繰り返し流したり、といの重ね方をかえたりしてみる。B児「水を多くしたらいいんちゃう？」と水を多く流すがまた同じところで詰まった。D児が「ここじゃ坂にならないからこっちから流したらいいんじゃない？」と築山を指さす。場を移して実際に流してみると、高さがあるのでゴールまでそうめんが勢いよく流れる。A児「流れた！」B児「やったー」と流れたことが嬉しく遊んでいた。

<反省・評価>

遊び込んでいく中で、問題を解決しようと試したり考えたり友達の意見を参考にしたりする姿があった。水の量であったり、スタートの高さだったり、組み立て方であったり原因を探りながら試していき、流れたことで達成感を味わった。



事例3・「みんなでつくった雪だるま」(1月)

園庭に雪が積もり、子ども達は「雪合戦がしたい」「雪だるまをつくりたい」と言って大喜びで園庭に出た。A児が雪を転がし始め「大きな雪だるまつくろう。これは体にする」と言う。それを見てB児も「一緒につくろう」と言って一緒に転がす。どんどん大きくなっていき、一緒に転がす子が増えていった。C児「じゃあこっちは顔をつくるね」と新しく雪を転がし始めた。A児「顔を乗せよう」「せーの」と力を合わせて上に乗せた。「やった！できた！」と喜び、雪だるまが完成した。次の日から気温が上がり、だんだん小さくなっていく雪だるまを見て「さみしいな」と言う。雪に混じった土だけが残っていき「黒い雪だるまだ」「山みたいだ」と日々変化を感じていた。完全に雪が解け、土だけになると「雪だるまのお墓をつくる」と言って木や花を添えながら「また雪降ってほしいな」とつぶやいていた。

<反省・評価>

偶発的な雪に出会い、存分に触れて親しんだことで溶けてしまったことを「さみしい」という言葉の表出になった。生きものと関わったり飼育したりした経験がお墓をつくるという思いにつながったと思われる。

5. 研究の成果

- ・初めての集団活動において、保育者との「温かいかわり」が次の活動に取り組むきっかけとなった。
- ・園内だけでなく、感染症拡大防止対策を取りながら、できる範囲で様々な人たちとのかわりを持ち、交流する中で刺激を受けたり、感動体験を重ねたりすることで、主体的に活動しようとする姿が見られた。
- ・今年度は特に、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、人とかわる際に内容・行動などに制限がかかり十分な関わりを持つことができなかった。その中でも、「魅力ある保育」を探求し、感動体験を重ねられるよう工夫した。

6. 今後の課題

様々なひと・もの・こととのかわりの中で、自分の思いや考えを表現したり、相手の事を思いやったりするコミュニケーション力がまだ弱いように思われる。コロナ禍で人との関わりを十分にすることは難しいが、出来るところからはじめ、今後も様々な経験を積み重ねていく中で、身近な環境に親しみ人とのつながりを深めていけるよう保育内容の創意工夫に努める。